様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２００３６

研究課題名（和文）戦後日本の左派社会運動―継続する帝国経験と朝鮮戦争・ベトナム戦争―

研究課題名（英文）The experience of leftist social movements in post-war Japan

研究代表者
黒川　伊織（KUROKAWA, Iori）

神戸大学・国際文化学研究科・協力研究員

研究者番号：５０６１１６３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、①1950年代前半／朝鮮戦争下での抵抗の経験と、②1970年前後／ベトナム戦争下での反戦運動の経験を、国際海港都市・神戸の運動経験の聞き取り作業・史料発掘により具体的に跡づけた。そのうえで、朝鮮戦争下での抵抗を担った人々が、60年安保闘争を経て若い世代の担い手を育成し、そのような若い世代により1965年の北爆開始後にベトナム反戦運動がはじめられ、さらに次の世代の人々がベトナム反戦運動・地域の課題に向き合っていくさまを明らかにした。
本研究は、地域における運動経験の世代間継承のさまを明らかにし、従来、党派や組織の歴史として細分化されてきた社会運動史研究に新たな方法論を提示した。

研究成果の概要（英文）：This research, focusing on the international port city of Kobe, depicted the anti-war movement experiences under the Korean War in the early 1950s and the Vietnam War in the late 1960s and early 1970s by interviewing the activists of that time and analyzing relevant historical materials. This research revealed the fact that the anti-Korean War activists nurtured the next generation activists in the 1950s and early 1960s and that they became the leaders of the anti-Vietnam War movement and other types of citizens' movements after the late 1960s.
This research shed light on the process of succession of activist experiences from one generation to the next and thus presented a new method to liberate social movement studies from dogmatic perspectives of particular parties or organizations.

研究分野：社会運動史

キーワード：文化運動　平和運動　学生運動

１．研究開始当初の背景

(1)問題関心

研究代表者は、1920 年代前半の日本の左派社会運動史を〈帝国日本に抗する社会運動〉として体系的に捉え直す作業を行ってきた。この〈帝国日本に抗する社会運動〉の基底にあったのは、国際共産主義運動における一国一党主義の枠組である。外国人の共産主義者は居住国の共産党の指導に従うべきであるとするこの枠組は、日本の敗戦＝帝国解体後も持続し、1950 年代半ばに国際共産主義運動の路線転換に伴い解体し、1970 年前後に全共闘運動の高揚に伴い再発見された。研究代表者は、1920 年代前半に形成された思想・運動の枠組がアジア・太平洋戦争を経て戦後まで継続し、1970 年前後に再発見されるさまの連続と断絶を、通時的に見通すべきであると考えた。

(2)先行研究

研究代表者のこのような問題関心に応える先行研究は、残念ながら存在しない。たとえば『岩波講座アジア・太平洋戦争４　帝国の戦争経験』（岩波書店、2006 年）は、帝国経験の「残滓」や「痕跡」というかたちで戦後についても論じているが、左派社会運動史研究の観点は完全に欠落している。そもそも、1950 年代と 1970 年前後を通時的に見通すような研究視座自体がなく、両者はそれぞれ別個の研究課題として論じられているのが現状である。

まず、1950 年代についていえば、一方には、一国史的立場に立脚しつつ戦後日本の左派社会運動史を戦後民主主義の定着過程として描き出す歴史学的研究（広川禎秀ほか編『戦後社会運動史論』大月書店、2006 年）があり、他方には、東アジア情勢との連動性を重視したポストコロニアル的な思想史的・文化史的研究（岩崎稔ほか編『戦後日本スタディーズ１　40 年代・50 年代』紀伊国屋書店、2009 年）がある。

そして、近年広く取り上げられている 1970 年前後についていえば、絓秀実『1968 年』(筑摩書房、2006 年)と小熊英二『1968』（新曜社、2009 年）が代表的研究としてあるが、両者とも関心が新左翼諸党派に偏っていて、思想史的にも運動史的にも叙述に広がりが欠けるうえ、本研究が重視する東アジアとの関わりについても、ごく限られた局面でしか扱われていない。このような先行研究の動向を批判的に踏まえる本研究は、帝国経験から戦後の左派社会運動史を通時的に捉え直そうとするものであり、これまでの研究のなかで提起した〈帝国日本に抗する社会運動〉の戦後における行方を見定めようとするものである。

２．研究の目的

(1)朝鮮戦争下の社会運動史の描き直し

1989 年から 91 年にかけての冷戦構造の解体は、東アジアの地域秩序にも巨大な影響を与えた。本研究にとってとくに重要なのは、1989～91 年の変革に至る過程で、かつて弾圧され封印された 1940 年代末から 50 年代にかけての左派社会運動の記憶の封印が解かれ、当該期の左派社会運動像の描き直しが行われたことであり、その影響は日本にも及んでいる。本研究の第１の目的は、朝鮮戦争前後の時期の左派社会運動の経験を、1920 年代以来の〈帝国日本に抗する社会運動〉の枠組を踏まえつつ跡づけ直すことである。

具体的には、左派の日本人と左派の在日朝鮮人とが協働した左派社会運動の経験を明らかにするが、このような運動の枠組は、1954 年から 55 年にかけて大きく転換し、外国人の共産主義者は居住国の共産党ではなく祖国の共産党の指導下に入り、居住国の内政に干渉してはならないとされる。ここで問題なのは、旧来の研究枠組においては、この 1955 年の転換を過去へと遡及的に投影するかたちで当時の実態とはかけはなれた歴史叙述が一国史的枠組のもとなされてきたことにある。本研究では、同時代の実感に即した運動経験の叙述に基づき、一国史的枠組をこえた歴史像を提示していくことになる。

(2)「1968 年」の運動経験の捉え直し

運動経験の一国史的叙述に対する批判が噴出してくるのは、戦後民主主義の高揚としての 60 年安保闘争を経たのちの 1970 年前後のことである。その背景には、戦後日本の市民社会から排除され、戦後日本の民主主義から放擲されてきた人々―在日朝鮮人や在日中国人、被差別部落民など―の存在が可視化されてきたことがあった。彼らの存在が可視化されるなかで、封印された運動体験にもあらためて関心が向けられ、当該期の運動体験を隠蔽してきた従来の歴史叙述のあり方にも批判が向けられることになったのである。

1960 年代後半から 1970 年代前半にかけてこのような転換を促した要因はいくつも考えられるが、そのなかでも最大の要因はベトナム戦争であった。ベトナム反戦運動を介してアジアと出会う、という思想史的・運動史的文脈を想定することができる。本研究の第２の目的は、1950 年代後半以後国民化されていた戦後日本の左派社会運動が担い手の転換を伴いつつアジアと出会い直すさまを具体的に跡づけることである。

(3)戦後社会運動史の歴史像の通時的提示

(1)(2)を踏まえて本研究が試みるのは、国際的連関のもとで 1920 年代前半に形成された枠組を起点として、戦後日本の左派社会運動とアジア―とくに在日朝鮮人・在日中国人―との関係を通時的に見通すことである。朝鮮戦争後、1950 年代後半から 1960 年代前半にかけて国民化した左派社会運動が、ベトナム戦争を背景として異なる担い手に担われつつ再びアジアと出会うさまをふたつの事例に即して跡づけるとともに、同様の問題関心に立脚する検討を幅広く展開していくことを可能にするような汎用的な研究枠組を構築することが、この研究の最終目的である。

３．研究の方法

(1)地域に眠る一次史料・文書の発掘

本研究では、各地の図書館・資料館に所蔵されている一次史料・文書はもちろん、個人で所蔵されている一次史料・文書の収集・保存に積極的に取り組んだ。とりわけ、神戸地域に残される一次史料･文書に関しては,各研究機関・個人の協力を得て、網羅的な調査・収集を実施した。

(2)オーラル・ヒストリーの収集

本研究の方法のもうひとつの柱が、多くの当事者からのオーラル・ヒストリーの聞き取りである。当事者から別の当事者を紹介していただきながら、各当事者それぞれの出生・生育歴・運動経験といったライフ・ヒストリーを詳細に聞き取ることで、当事者の生と運動経験を有機的に結びつけることにした。とりわけ、本研究では、高齢の当事者の再会の場を積極的に設け、各当事者それぞれの記憶を呼び覚ますという手法をとった。

(3)文書資料とオーラル・ヒストリーの融合

(1)(2)の方法を踏まえて、本研究では、文書資料を同時代の文脈に即して捉え直す方法を意識的にとった。左派社会運動における文書資料は、概して、無味乾燥な公式言説を繰り返すようなものが多いが、当事者の回想と結びつけることで、行間にあるさまざまな共感や軋轢を読み取ることができるのである。

４．研究成果

３であげた方法を実行するにあたって、研究代表者がとくに注目したのが国際海港都市・神戸である。神戸は、敗戦後に神戸港が米軍に接収されて朝鮮戦争の出撃基地となり、神戸港の完全返還が実現したのはベトナム戦争終結 1974 年であったように、本研究が着目する朝鮮戦争下での抵抗・ベトナム反戦運動の事例を象徴しているからである。

本研究では、神戸に即して以下の研究成果をあげることができた。

(1)朝鮮戦争下の運動経験の研究

①朝鮮戦争下での反戦平和運動の経験

朝鮮戦争勃発直後の神戸では、レッド・パージにより職場を追放された人々を担い手とする反戦平和運動が、占領軍の抑圧に抗して実行されていた。兵器・兵員の出撃基地となっていた神戸港では港湾荷役のサボタージュが、地域の大工場では兵器生産のサボタージュが、多くの被検挙者を出しつつ実行された。この運動を担った人々の多くは、その後の警職法反対闘争・60 年安保闘争を担い、1965 年にはじまるベトナム反戦運動につながる人脈を構築していた。

②1950 年代サークル誌運動の史料発掘･研究

反戦平和運動の担い手から聞き取りを行うなかで、神戸で発行されたサークル誌の現物の提供を受けた。近年盛り上がりを見せるサークル誌運動研究のなかでも、神戸の事例は、朝鮮戦争下で抑圧に抗して発行されたサークル詩誌の現物が多く残っているという点で他に類を見ない史料群であるといってよい。その特質は、多くの在日コリアンを抱える神戸の街を反映して、日本人と在日コリアンが協働してサークル誌運動を行っていることにある。神戸のサークル誌については、神戸文学館と協力して精力的に情報発信・史料収集を今後も続けていく予定である。

(2)地域のベトナム反戦運動の研究

①ベ平連こうべ

ベ平連こうべ（1969-78）は、神戸大学闘争の直後、ノンセクト・ラジカルの神戸大学生を中心に結成された。その特質は、ベトナム反戦運動をきっかけに在日コリアンへの差別・部落差別など地域のさまざまな差別問題に積極的に取り組んでいったことにある。近年、各地の地域ベ平連についての研究がはじまっているが、ベ平連こうべは、当事者の努力により膨大な一次史料を当時のままに保存している。その分析は、今後、国立歴史民俗博物館での共同研究のなかで、研究代表者が引き続き実施していく予定である。

②ベトナムに平和を！神戸行動委員会

1965 年の北爆直後に神戸アメリカ領事館前での抗議行動をきっかけに結成された神戸行動委員会は、神戸大学の教員・学生を中心に、神戸大学闘争が激化するまで反戦運動を担った。その特質は、朝鮮戦争下での抵抗を担った人々の人脈が活動を下支えしていたという点にある。具体的な活動を担った学生の多くは、その後、院生共闘などのかたちで大学闘争にも関わっていくことになる。神戸行動委員会の活動は、60 年安保闘争から「1968 年」の大学闘争を架橋するうえで、重要な意味をもち、「1968 年」における運動の連続と断絶を考える手がかりとなった。

(3)戦後の運動経験を通時的に見通した研究

(1)(2)であげた個別具体的な事例を検討するなかで、研究代表者は、神戸地域における運動経験が世代を超えて継承されつつあるさまを見出した。具体的には、敗戦後の神戸で復興を担い、朝鮮戦争下での抵抗の矢面にたった人々が、北爆の開始直後に、より若い世代の学生たちによる手探りの運動を物心両面で支え、さらにその学生たちがベ平連こうべの担い手を育てていったことに、従来のような党派や組織、あるいは労働運動・学生運動などの分野別に叙述されてきた運動史とは異なる歴史の可能性を見出したのである。「朝鮮戦争・ベトナム戦争と文化／政治」と題して『同時代史研究』に発表した論文はこの点を主題としており、運動史研究に新たな方法論を導入したものと評価された。

(4)今後の課題

①戦前の運動経験との連続性の解明

敗戦直後に神戸の運動を担った人々は、1920～30 年代の神戸でプロレタリア文化運動・人民戦線運動を担った経験をもつ。この点に着目した研究代表者は、戦時下の「転向」言説により分断されてきた運動経験の叙述に貫戦史的な視座を導入して、運動経験の連続と断絶を捉え直すべきだと考える。

②ベトナム反戦運動を担った人々のその後
「1968 年」＝全共闘世代の経験は、1972 年の連合赤軍事件の衝撃もあり、概して否定的に語られがちである。しかし、ベ平連こうべを担った全共闘世代の人々は、ベ平連運動から地域固有の課題を見出し、今なお運動を粘り強く続けている。彼ら／彼女らのその後の運動経験を検討することで、「1968 年」の経験の積極的側面が評価できるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計９件）

① 黒川　伊織、「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」の記憶、アリーナ、中部大学総合学術院、査読無、17 号、2015、頁数未定
② 黒川　伊織、新日本文学会神戸支部と朝鮮戦争―詩人・直原弘道とその時代―、社会文学、日本社会文学会、招待、42 号、2015、頁数未定
③ 黒川　伊織、今堀誠二『原水爆時代』再読―1951 年「原爆記念全国平和会議」の位置づけを中心に―、原爆文学研究、原爆文学研究会、査読無、13 号、2014、38-45
④ 黒川　伊織、朝鮮戦争・ベトナム戦争と文化／政治―戦後神戸の運動経験に即して―、同時代史研究、同時代史学会、査読有、7 号、2014、3-17
⑤ 黒川　伊織、1920 年代日本思想史と第一次国共合作、日本思想史学、日本思想史学会、査読有、46 号、2014、190-207
⑥ 黒川　伊織、1950 年代サークル詩運動における部落民の表現―酒井真右と部落解放詩集『地ぞこからのうたごえ』―、京都部落問題研究資料センター通信、京都部落問題研究資料センター、招待、35 号、2014、2-5
⑦ 黒川　伊織、プランゲ文庫所蔵日本共産党機関紙・細胞新聞一覧、メディア文化研究、神戸大学メディア文化研究センター、査読無、2 号、2014
http://www2.cla.kobe-u.ac.jp/cmec/publications.html
⑧ 黒川　伊織、〈まいおちるビラ〉と〈腐るビラ〉―朝鮮戦争勃発直後の反戦平和運動と峠三吉・井上光晴―、社会文学、日本社会文学会、査読有、38 号、2013、104-115
⑨ 黒川　伊織、神戸におけるベトナム反戦運動の経験：1965-78 年―「神戸行動委員会」から「ベ平連こうべ」へ―、メディア文化研究、神戸大学メディア文化研究センター、査読無、1 号、2013
http://www2.cla.kobe-u.ac.jp/cmec/publications.html

〔学会発表〕（計９件）

① 黒川　伊織、朝鮮戦争下神戸港における抵抗―新発見のサークル誌に即して―、在日朝鮮人運動史研究会、2014.12.14、神戸市立中央図書館（兵庫県）
② 黒川　伊織、1969 年・神戸大学闘争の記憶、神戸大学共創社会研究会、2014.12.5、神戸大学（兵庫県）
③ 黒川　伊織、人民戦線運動の経験とその戦後への遺産―文化運動を中心に―、社会思想史学会、2014.10.26、明治大学（東京都）
④ 黒川　伊織、戦後文化運動における朝鮮戦争の経験―新日本文学会神戸支部を中心に―、日本社会文学会、2014.6.14、東京学芸大学（東京都）
⑤ 黒川　伊織、戦後文化運動からベトナム反戦運動へ―戦後神戸の運動経験に即して―、同時代史学会、2013.12.7、一橋大学（東京都）
⑥ 黒川　伊織、1950 年代のサークル詩運動と部落民の表現、世界人権問題研究センター、2013.9.30、世界人権問題研究センター（京都府）
⑦ 黒川　伊織、神戸におけるベトナム反戦運動の経験―小島輝正・君本昌久を中心に―、日本社会文学会、2013.9.12、PLP 会館（大阪府）
⑧ 黒川　伊織、ベトナム反戦から内なるアジアへ―ベ平連こうべの軌跡、神戸大学共創社会研究会、2013.8.6、神戸大学（兵庫県）
⑨ 黒川　伊織、地域ベ平連とアジア―「ベ平連こうべ」の事例を中心に―、日本思想史学会、2012.10.28、愛媛大学（愛媛県）

〔図書〕（計４件）

① 黒川　伊織　他、三人社、『山河』復刻版解題、2015、頁数未定
② 黒川　伊織　他、法律文化社、戦後日本思想と知識人の役割、2015、403（351-371）
③ 黒川　伊織、有志舎、帝国に抗する社会運動―第一次日本共産党の思想と運動―、2014、317
④ 黒川　伊織　他、航思社、時代に抗する―ある「活動者」の戦後史―、2014、139（96-139）

〔その他〕

① 黒川　伊織、神戸文学館特別展示「神戸・サークル誌の時代」展示・解説・図録作成、2015.4.24～2015.7.12、神戸文学館（兵庫県）
② 黒川　伊織、海港都市神戸のサークル誌―街・人・文学―、神戸文学館特別展示「神戸・サークル誌の時代」開催記念講演、2015.5.30、神戸文学館（兵庫県）
③ 黒川　伊織、サークル誌探しています―労働者らの「叫び」を掲載―、神戸新聞、2015.4.25

６．研究組織

(1)研究代表者

黒川　伊織（KUROKAWA, Iori）
神戸大学・国際文化学研究科・協力研究員
研究者番号：50611638